

「約束の救い主」

マタイによる福音書 1 章 18-23 節

「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」(18 節)。ヨセフは、婚約者が自分以外の何者かによって妊娠したという事実をつきつけられました。このときヨセフがどんなに大きなショックを受けたかは想像に難しくありません。人生で最も幸せに満たされていた時から一転して、ヨセフは、マリアに裏切られたという気持ちと、マリアを失いたくないという気持ちとの狭間で、悲しみ、怒り、傷つき、苦しみ悩んだことでしょう。

考え抜いた末に、ヨセフは一つの決心をします。「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(19 節)。

ヨセフは「正しい人」だった聖書にはあります。それは律法を正しく守る人だったということです。でも、それと同時に、ヨセフは人を思いやる心を持った人でした。ただ律法を守ることだけに一生懸命であったら、ひそかに婚約を解消しようとは考えなかったはずです。「悪いことは悪い」と割り切って、マリアを告発したかもしれません。でも、それをしなかったのは、ヨセフが律法の本当の意味を知っていたからにほかなりません。

ユダヤの人たちが一生懸命守ろうとしていた律法は、人々が平和に、そして幸せに生きるためにと神さまが与えてくださった約束事です。ですから、本来、律法は人を生かすためのものなのです。ヨセフは、律法の本当の意味を正しく理解していたからこそ、マリアを生かす方法を見つけようと悩んでいたのです。そして、さんざん悩み抜いたあげく、彼はひそかに婚約を解消するという道を選んだのです。そうすることで、マリアには無事に子供を産んでもらって、自分は妻と子どもを捨てた無責任でダメな男として人々の批判にさらされても良い、そういう決断をしたのです。ヨセフの人を思いやる優しさは、律法を正しく知っている人が持つ本当の優しさなのです。

そんなヨセフのもとに、神さまの使いである天使が夢に現れます。天使を通して神さまはヨセフに、マリアを妻として迎え入れ、なおかつマリアの生む子供を自分の子として受け入れ、その子の父となることを求めたのです。

父となるということは、その子を守り育てるための責任を負うということです。現にこの後ヨセフは、幼いイエスさまを守るために、エジプトにまで逃げていかなければなりません。そういう全てのことを引き受けるようにと、神様はヨセフに言われたのです。つまり、父なる神様は、ご自分の独り子の運命を、その子が救い主として生まれ、生きていくことができるか否かを、ヨセフという一人の男に委ねられたのです。彼の信仰の決断に、ご自分の独り子の命さえもお委ねになったのです。

ヨセフにしてみれば、「私にはそんなことをする義務も責任も、マリアと子どもを愛し通す

自信もない」、そう言って断ることもできたはずですが。でも彼は、神様の御言葉の通りにしたのです。そして、ヨセフがそのような人だったからこそ、イエス様はヨセフの子どもとして生まれてくることができたのです。

ヨセフに現れた天使は、「生まれてくる子はインマヌエルと呼ばれるようになる。」と告げます。でも、じつは、多くの人に呼ばれるよりも先に、イエスさまはまず、ヨセフにとってのインマヌエルでした。「神、ヨセフと共におられる」だったのです。そして、この言葉があったからこそ、ヨセフは重大な決心ができたのではないのでしょうか。

ヨセフとマリアは自分の力と能力で、神様から与えられたイエスさまの父、イエスさまの母としての務めを全うしたのではありません。マリアとヨセフの傍らには、いつもイエスさまがいてくださいました。ヨセフとマリアは父・母としてイエスさまを守り、育てなければなりませんでしたが、じつは、そのイエスさまによって、ヨセフもマリアも守られてきたのだと思うのです。守っていたように見えて、じつは守られていた。そして、インマヌエルの恵みを、誰よりも深く、豊かに受けていたのは、このマリアとヨセフであったのだと思うのです。

神は我らと共にいます。「私」だけではありません。「我ら」です。この「我ら」という広がりの中で、この世界の全てが、この恵みの中に包まれ、とらえられていることを信じてまいりたいと願います。